

帰ってきたウルトラの父

鳴海風

この春、二十歳の長女が社会に巣立つて行った。

職場にも慣れたらしい六月の金曜日、早朝、二人でデイズニーシーへ行くと、名古屋駅新幹線改札口で待ち合わせた。私は会社の有休を取ったが、休日が不規則にめぐってくる長女は連休となる。

長女は調理師専門学校を卒業して、名古屋駅にある高層ビル内のホテルのレストランにコックとして就職した。年中無休のレストランだから、早番遅番も組み合わせて、全員が平等に休めるように変則の休日シフトが編成される。在学中は同ホテル内の別のレストランでアルバイトを続けていたし、学校の実習でも同ホテルの宴会場が現場に選ばれたから、ホテル内に人脈もできていて、就職先としては第一志望だった。長女は運良く採用され、希望のレストランにも配属されたが、そこはもう何年間も新人女子

ないギリギリの長さにスカートを短くすることに夢中になった三年間だったように思う。

その長女が、調理師専門学校に行きたいと言いついたときは、予想もしていなかった進路で当惑した。ただ、勉強嫌いの（当時はそう見えただが）長女が形だけの大学進学を選ばなかったことはホッとしていた。

ところが入学すると、勉強も実習も信じられない熱心さで、毎回優秀な成績を上げて、私を驚かせてくれた。卒業前にはストリートで運転免許も取り、就職活動もマンション探しもすべて自分の意志で行動して目標を達成した。超人的な娘だと感心した。

私は照れ隠しにご褒美だと言って、恐る恐るデイズニーシー行きを提案した。一ヶ月前に女房と行って勝手は知っている。

「ランドは行ったことあるけど、シーは初めてだから行きたい」

それで、決まった。就職した長女は、新人合宿研修でも並み居る大卒新人を尻目に優秀な成績を上げて表彰され、厨房の激務にも耐えていた。

が定着したことの無い厳しい職場だった。終日、立ち仕事で体力を使うし、気を抜けばシエフから叱咤される。

ホテルのレストランは、開店から閉店までの営業時間が長い。豊かな自然環境を私が求めた結果、名古屋から電車で小一時間かかる所で長女は育った。それが障害となった。始発電車に乗っても早電には間に合わないし、遅番のときは終電がなくなってしまう。男の私ですら、大学時代もまだ自宅から通っていたのに、長女は親元から出るようになった。

待ち合わせ場所に、長女は名古屋の一人住まい専門マンションからやってきた。私はもちろん自宅からで、乗ってきた電車から送ったケータイメールの返信で、長女が早々と駅に着いていることも分かっていた。週末とはいえ、早朝の新幹線はビジネススマンが多い。その中に奇妙な父娘が乗り込んだ。

長女との間に急激に溝ができた

デイズニーシーでは、開門から閉門までたづぷり楽しんだ。二人でビールやワインも飲んだし、新しい恐怖のアトラクション「タワー・オブ・テラー」も体験した（もつとも私は怖くて目が開けられなかったから、体験は半分だったかもしれないが）。また、おとなしき喜びでもないジャズバンド演奏を楽しんでいる長女の姿を見て驚いた。

その夜、ホテルに着いて、腰の万歩計をチェックすると、二万二千歩を超えていた。

翌日は、長女の希望で、六本木ヒルズと表参道ヒルズに行った。最新ファッションのチエックを長女はしたのだ。私は、二十歳前後の娘たちの間で流行しているアンサンブルなどを知ることができた。

デイズニーシーの土産物やヒルズでの買い物で荷物が増えることを予想していたので、帰りの新幹線は座席周りがゆったりしているグリーン車にした。

静かな車内で長女が呟いた。「まさかお父さんが調理師専門学校へ行くのを許してくれると思っていなかった……」

高学歴の父を持った長女は、当然私が

のは中学入学後からである。それまで親の言う通りにする素直な子だと信じていたが、裏切り行為が次々に繰り返された。

「それ、今まで食べていたじゃないか？」

「嫌いだつたのよ」
我慢して食べていたらしい。

誕生日のプレゼントに服を上げてても、デザインが気に入らないと言つて着ない。

評判の良いくない女友達と付き合い出した。さらに、親にことわりもなく、部屋へ男友達を連れ込んだのには仰天した。男友達が帰った後、部屋を片付けた女房から、たばこの臭いがしたと聞くに及んでは、私も怒り、嫉のやり直したと、尼僧が教える茶道教室に無理矢理通わせた。

高校は規律の厳しいことで評判のところへまふまふと入学させたが、罰せられ

大学進学を求めているものと思いついたのだ。

「ぼくは最初から、学歴は親のためじゃない、と言つていたじゃないか」と反論したが、親娘の気持ちの齟齬は、厳然と存在していたということだ。

「現在の生き方を応援しているから頑張りなさい」

「ありがとう」

何年も前自分の中から出て行ってしまった長女が帰ってきたような気がしたが、成長していく長女の目から見れば、期待される会社員としてまた作家としてウルトラマンのように多忙な日々を送る父親こそ、自分の心から出て行ってしまったのであり、そういう意味で、私こそ帰ってきたウルトラの父だったのかもしれない。

「ウルトラマンにも家族があるんだよ」

「え？ 何？」

「いや、何でもない」

疲れが出てきた私はそつと目をつぶった。長女の前途を頭の中に描こうとしたが、そこにはウルトラの父の一番はなさそうだった。